

11月21日(火)

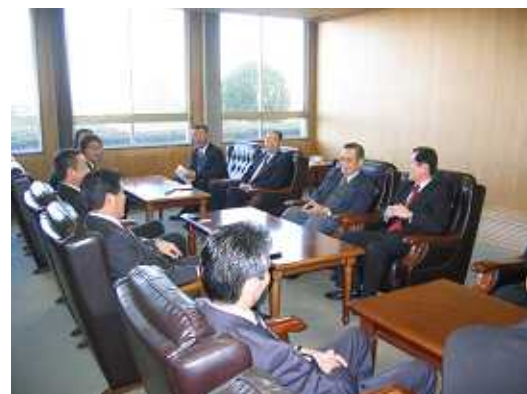
高松青果株式会社

四国地方の天候は秋になっても例年より高い気温が推移していたが、11月15日頃から冷え込み、煮炊き商材であるメイクインについては、ここにきて動き出している状況である。

今年産メイクインは、販売開始より早出し産地の出荷が後連れ、十勝産も例年より量が多く価格面では苦戦しているとのこと。

長いもについては、16年産～17年産にかけ豊作による価格低迷が続きましたが、平成18年産においては、前年までの物量が無く、秀品で4,000円から3,800円前後迄へ価格が回復してきた。大正長いもの19年産初売りは11月21日の予定だが、価格変動は無く、秀品3,800円くらいで販売できる見込み。

また、高松市主催による「浴衣コンテスト」が開かれ、上位者には海外旅行をはじめとした数々の商品が授与され、その中に「JA帯広大正賞」として当農協のメイクイン、長いも、大根を授与。野菜をプレゼントした事で大変目立ち人気があったとのこと。さらに今月11月11日には高松青果のある高松市中央卸売市場において「たかまつ市場フェスタ」が開かれ、高松青果のブースでは帯広市に係わるパネルの展示、先着200名に大正メイクイン小袋入のメイクインを配布し、多くの方々に帯広市・JA帯広大正を知って頂く機会となりました。無料配布にはたくさんの行列ができたそうです。今後もなくてはならないブランドにして欲しいと社長より説明がありました。



高松市役所 表敬訪問

「世界の中心で愛を叫ぶ」のロケ地となった高松市と、「愛の国から幸福へ」を打ち出している帯広市との都市交流は、“愛”をキーワードに始まった。

本年4月の統一地方選挙で高松市長に初当選した大西秀人高松市長が、就任早々の仕事として「愛と幸福の都市交流」を帯広市に提案し、6月には、高松市民訪問団が帯広市を訪問、10月には帯広市民訪問団が高松市を訪問し、将来的に姉妹都市提携を視野に入れた交流がスタートした。

この交流は、砂川敏文帯広市長が香川県さぬき市出身であったことと、大西秀人高松市長が自治省から北海道庁に出向していた折に、砂川市長と熟知の間柄であったことにも起因している。

こうした中、高松青果（株）が仲介となり、11月11日に開催された“たかまつ市場フェスタ”において、「愛の国から幸福へ」の帯広市コーナーを設置して、帯広大正農協産農産物の展示および宣伝配付を実施した。

この度、帯広大正農協の役員研修で高松市を訪問することとなり、これを機に、高松青果（株）斎藤良紀代表取締役と共に大西秀人高松市長を表敬訪問し、「大正メークイン」「大正長いも」と大正産豆類のPRを行なった。



株式会社 太陽

昭和25年高知で耕運爪を日本初で開発。その後パテントを取り原形はここで製造されるが、現在では他会社でも作ることが出来る。

先代が刀、鋤をもともと製造していたが、戦後労働者が多数加わり鉋爪を考案、ロータリー耕運機時代に向けた生産体制を確立し、昭和35年頃に各府県の経済連、ホクレンとの取引を開始している。近年では道内をはじめとした高馬力、大型機械に合う爪を製造しており、その数は2000種以上。主力商品は「青い爪」「だんだん爪」等が有名。

古い耕運機等で年数本しか需要の無いものでも、注文に合わせ製造している。金型は社内で製造、原料の金属は愛知製鋼（トヨタ自動車グループ）を使用している。

11月頃から春に向けては来年度用として生産のピークを向かえ工場は忙しい。

製造ラインの機械は全て自社開発。点検・検査についても自社の専門家が行っている。作業員はブロック内（1～3・4～8・9～12）で2時間置きでのローテーション。工場は通常の休みのほかに、年2回10日程度の連休がある。この連休を活かし機械の修理・メンテナンス等を内部社員で行っているようだ。

鉄価格の上昇、並びに製造時における燃料価格の上昇により、来年4月より製品価格の値上げを予定。5年前からみると経費は2倍程度になっているとのこと。



11月22日(木)

高知春野農業協同組合

J A高知春野がある高知県春野町は、高知市の南西に位置し、東西南北7 km程の平坦地、太平洋に面した気候温暖な県内でも有数の園芸地帯である。

農協は平成2年に合併。区域の中心である約2 haに各施設を集約し、本部事務所・金融事務所・給油所・Aコープ・直売所・配送センター等を設置した。生産者は車で約20分以内の圏内にある為、利便性は良い。

合併当初の農協役員は多数在籍したが、現在では理事16名、監事6名となっている。

園芸施設については、生産農家の労働力軽減ときゅうり・なすの産地維持拡大を図る為、平成4年に補助事業で共同選果施設の建設、平成5年に機械設備を設置、同年稼動となっている。全体での総事業費は10億5千万。機械類の償却が8年である為、以後8年先迄の作付意向調査を全生産者へ実施し、施設建設へ踏み切った。

きゅうり選果場の処理能力については、当初7,700トンであったが、年々数量が伸び、現在では約9,000トンとなっているが、選別期間を長期化させる事で対応している。毎年10月から6月頃迄随時選果・出荷を行っている。尚、キュウリ終了後の施設はナスの選果に移行するが、きゅうり選果が年々延びており、ナスの出荷は当初より後連れしてきている。

生産者は朝収穫したてのきゅうりを20 kg入ミニコンテナに入れ出荷。その後は選果施設において朝8時30分より選別・箱詰めされる。作業員は約80名。重量・規格についてはカメラ選果で行っている。生産者間の平準化を目指しカメラ選果を数年前に4億5千万円かけ導入した。箱詰めはラインにより異なるが、手作業とロボットによる方法がある。1日約80tの選果を行うことが可能。箱詰めされた製品については、県園芸連を通じ関東方面を中心に全国へ出荷されている。輸送方法は主にJRコンテナだが、高知は利便性が悪く、高松市内までトラックによる陸送後、列車に積み替えされ、消費地へ運ばれている。

ナスについては、米ナス・丸形ナスが主流。約9 haの作付で年間約1,000tの取り扱いとなっている。選果場は1日約40t前後の処理が可能。

その他品目について、オクラは機械包装を行う事で作業省力化をはかり、生産者離れを防ぎ面積の維持。トマトについては、過去に20万ケースの取扱いであったが、年々減少し、現在では半分の10万ケース台の取扱いとなっている。

園芸作物の生産面積は約147 ha、生産者は380戸で販売高は19年度予想で約52億円であるが、過去には約80億円もの売上げがあった事もあった。少子高齢化に伴う後継者不足の問題、施設の加温に必要な重油の値上げ等によるコスト増により、手取り収入が年々減少傾向にあるとのこと。

直売所については下位等級の農産物を販売する為、市内4ヶ所、事務所敷地内1ヶ



所計5ヶ所開設されている。

生産部会については、それぞれ品目毎に部会があり、営農指導・販売職員7名がそれぞれの部会を担当している。ナス部会・メロン部会については支所単位で組織されるが、それ以外は本部一括の組織である。費用は出荷奨励金で運営し、技術面で相談のある時は、地元普及センターとも協力し取り進めている。

平成20年1月には、高知市と春野町が合併を予定。新市内にはJA高知市とJA高知春野の2農協となるとのこと。最近では石油価格上昇等による経費も増えており、県・市・農協をあげてのコストダウンをはかり、今後も物量を維持し、さらに伸ばしていきたいと説明がありました。

J A 高知春野 選果場及び生産者圃場

